

研究課題	児童生徒の「生涯学習力」を高める教育課程の実践
副題	～オリジナルマップを活用したつながりの構築～
キーワード	Google マイマップ、生涯学習、学びの履歴
学校/団体名	国立国立大学法人秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
所在地	〒010-0904 秋田県秋田市保戸野原の町 7-75
ホームページ	http://www.sh.akita-u.ac.jp

1. 研究の背景

平成29年4月に文部科学大臣メッセージ「特別支援教育の生涯学習化に向けて」が発出され、障害者の生涯を通じた多様な学習活動を支援するための取組が開始された。平成30年文部科学省が行った「学校卒業後の学習活動に関する障害者本人等アンケート調査」では、「共生社会に向けて、学習機会の充実は重要である」と回答した割合が8割強であるのに対して、「学びの場やプログラムが身近にある」と回答した割合が3割程度と圧倒的に学びのニーズはあるものの、学ぶ場が整備されていないことが分かる。

平成31年3月には、学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議報告「障害者の生涯学習の推進方策について－誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して－」で、学校教育における学びと学校卒業後の学びを接続し、生涯にわたって学び続けられるようにすることの重要性や、学校教育から卒業後の学びに円滑に移行する必要性などが述べられている。

本校では、個別の教育支援計画（本校では、「私の応援計画」と呼んでおり、以下「私の応援計画」）を児童生徒が「夢」や「願い」、「目標」を生徒と教師、保護者との対話の中から見出し、自分のよさや長所に着目しながら、本人が主体となって作成する「私の応援計画」を教育課程編成の中心に据えている。「私の応援計画」を基に、関係者と連携した支援を行うためのツールとして積極的に活用している。また「私の応援計画」に関わる研究を通して、自分の「夢」や「思い」に向かって、主体的に行動を選択・決定し、生涯にわたって学び続けることが重要であると確認した。

そこで、過年度の研究において生涯学習に向かう力として「生涯学習力」を「主体的にヒト・モノ・コトに関わり、生涯にわたって学びに向かい成長しようとする力」と定義した。「生涯学習力」を高めるためには、「私の応援計画」で「夢」や「願い」、「目標」を見出していく点や地域資源に目を向け、利活用を通して身近な学ぶ場を知っていくことが重要な要素と考える。

本校の児童生徒にとって有効な地域資源や本校と結び付きのある人材も含めた資源を共有したり、学校生活や社会生活において将来を思い描くためのロールモデルをつくったりするツールを在学中から用いることにより、本校の児童生徒の「生涯学習力」が高まると考える。

2. 研究の目的

本校では、児童生徒の「夢」や「願い」、「目標」を教師、保護者との対話の中から見だし、「私の応援計画」を基とした教育課程を編成し、日々の教育活動に当たっている。過年度の研究

では、言葉で表現することが難しい児童生徒も含めて、全ての児童生徒の「夢」や「願い」、「目標」を見い出す工夫を行っていくことが課題として挙げられている。また、児童生徒との対話の中で語られる内容は、その児童生徒がこれまで見聞きしたり、体験したりしたことを基に語られることが多く、将来の夢や地域の資源についても限定的であることが顕著に見られる。

また、本校では、主体的にヒト・モノ・コトに関わり、生涯にわたって学び続ける力を「生涯学習力」と定義付け、卒業後もヒト・モノ・コトと関わりをもちながら、学び続けられる児童生徒を育てるための教育課程を編成し、日々の授業づくりに取り組んでいる。

以上のことから、「生涯学習力」を高める授業づくりを進めるために、自分の「夢」や「願い」、「目標」を考えたり、地域の学ぶ場を知ったりすることに効果的なツールを作成し、活用するための仕組みをつくることを本研究の目的としている。

3. 研究の経過

本研究は、小学部、中学部、高等部の学部を超えたワーキンググループを組織し、月1回程度の頻度で開催し研究に当たった。研究の取組は次の4点であり、実践時期等は表1のとおりである。

- (1) オリジナルマップに関わる実践事項の検討と協議や実践の整理
- (2) Google my map を活用したオリジナルマップの作成と学習活動での活用
- (3) オリジナルマップを効果的に活用するための研修
- (4) 研究成果等の発信

表1 研究の経過

時期	実践内容	
	◆児童生徒の学習に関わること	◆職員の実践に関わること
5月	(2) 中学部・高等部マップ制作	(1) 研究の目的の共有
6月	(2) 学習・単元終了後マップ記入 (継続実施)	(1) オリジナルマップのメリット、デメリット等の検討
7月		(3) オリジナルマップについて (職員研修)
8～9月		(4) 夏のセミナー(研究経過報告) (1) 夏のセミナーでの意見交換 (3) オリジナルマップマニュアル作成
10月	(2) 小学部学習内容の整理	(3) オリジナルマップに関わる機材について(職員研修)
11月	(2) 中学部3年 修学旅行行程紹介での活用	
12月	(2) 高等部1年 現場実習先紹介での活用	(1) 研究内容の成果・課題の整理
1月		(4) 公開研究協議会(研究報告)
2月	(2) 年度末の振り返りでの活用	(4) 研究紀要(研究報告)

(1) オリジナルマップに関わる実践事項の検討と協議や実践の整理

- ①研究の目的の共有

研究を推進するに当たり、昨年度の研究で試行的に行ったオリジナルマップの実践や成果をワーキンググループ内で共有した。また、児童生徒に関しては、「オリジナルマップの完成がゴールではなく、マップを活用した学習を通して、自分が頼ることのできるヒト・モノ・コトや、地域の活用できるヒト・モノ・コトに気付いたり、分かったりすること」、教師に関しては、「オリジナルマップを活用した学習を通して、生涯にわたり自ら学習を進めようとする意欲や、その動機付けとなるように指導すること」が本研究の目的であると共有した。

②オリジナルマップのメリットとデメリットについての検討

オリジナルマップを活用する上で、メリットとデメリットの検討内容は、表2のとおりである。

表2 オリジナルマップ活用上のメリットとデメリット

メリット	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的に情報を得やすい（地理的な関係が理解しやすい） ・地図上に写真、テキスト等の情報を必要に応じて追加できる（タイピング、音声入力、タッチペンなど複数での入力が可能） ・地域の施設等の web サイトに接続できる
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末の操作に慣れていないと時間が掛かる ・発達の段階によっては、意図的な入力や管理が難しい

③夏のセミナーでの意見交換

校外からも参加者を募り、16名でオリジナルマップの活用やつながりの構築に向けた意見交換を行った。その中では、夢や思いの実現に向けて子どもたちの世界を広げることが大切であること、生徒それぞれのマップを共有することで効果が高まるのではないかと、実体験と抽象概念をつなげていく上で ICT 機器が効果的であること、卒業後も使えるツールになることが望まれることなどの意見が出され、夏のセミナー以降の実践に取り入れることを確認した。

(2) Google my map を活用したオリジナルマップの作成と学習活動での活用

①中学部・高等部のマップ制作

学部や生徒の実態を鑑み、中学部は学級ごとに一つのマップを制作し、高等部は生徒一人ずつマップを制作することとした。高等部においては、一人ずつ Google アカウントの取得から学習内容として組み込み、自分のオリジナルマップを作成した（写真1）。

また、地域を活用した学習（校外学習や産業現場等での実習）を行った際には、関わった施設を地図上に登録し、情報を加えていった。生徒は、タブレット端末の扱い方に慣れ、新たに家庭生活で訪れた場所や施設についても自主的に追加するようになった。



写真1

②小学部の実体験と抽象概念をつなげる実践

夏のセミナーの意見交換では、実体験と抽象概念をつなげていく上で ICT 機器が効果

的であるとの意見が出された一方で、小学部段階では、マップの活用に向けて、マップを含めた ICT 機器に慣れることや実体験と文字や写真といった抽象概念とを結び付ける経験が大切であると考へ、学習活動全体において実体験を文字や写真を用いて振り返る学習に力を入れ、取り組んだ(写真2)。



写真2

③中学部のオリジナルマップを活用した学びを紹介する実践

中学部では、興味・関心に基づいてマイマップを活用することを目指し、実践した。

中学部3年生においては、将来の生活を「働く」「暮らす」「楽しむ」の観点から職場や地域の施設を見学・体験し、マップに情報を入力し、友達や後輩に紹介した。また、秋田県内での修学旅行では、旅行のしおり作りの一環として行程をマップで制作したり、結団式で後輩たちにマップを用いて発表したりして活用した(写真3)。



写真3

④高等部のオリジナルマップを活用した学年末の振り返りの実践

高等部では、研究の目的にもあるように、オリジナルマップの作成を通して、自分の「夢」や「願い」、「目標」を考えたり、地域の学ぶ場を知ったりすることができるように、学年末の学習の振り返りでもオリジナルマップを活用した。自分の夢や思いを具現化するためのシート(私の応援計画)とオリジナルマップを見ながら、教師との対話を通して今年度の学習を振り返った。オリジナルマップに登録した内容(施設の情報や学習の成果)を見直して、今年度の自分の成長や取組をタッチペンで記入したり、次年度以降の夢や取り組みたいことを教師と対話しながら決めたりした(写真4)。



写真4

(3) オリジナルマップを効果的に活用するための研修

①オリジナルマップについて(職員研修)

中学部・高等部のオリジナルマップを作成する際には、オリジナルマップの作成の仕方を知っている職員に聞きながら行った。しかし、今後児童生徒が効果的にオリジナルマップを活用するためには、職員がオリジナルマップについて知っておく必要があり、研修会を行った。内容は、オリジナルマップの概要やメリット、作成の仕方などについてである。

②オリジナルマップマニュアルについて

研修会を行ったものの、今年度だけの実践ではなく、今後も持続可能な実践となるよう、オリジナルマップの作成や活用について整理されたマニュアルの作成を行った。マニュアルの内容としては、作成手順や「私の応援計画」への活用方法、学習での活用方法についてである(図1)。



図1

③オリジナルマップに関わる機材について(職員研修)

夏のセミナーの意見交換でも挙げたように、「生徒それぞれ

れのマップを共有することで効果が高まる」とのねらいから、それぞれのマップを共有できる場所や機材が必要と考え、助成金を用いてモニターやメインとなるタブレット端末を整備した。一方で、これらの機材も場所や使い方を職員が知らなければ効果的な活用にはつながらないため、職員研修を行った。

(4) 研究成果等の発信

研究の成果等を発信したのは、次のとおりである。

時期	会の名称等
8月	夏のセミナー（参加者：90名）
12月	キャリア発達支援研究会第9回年次大会（参加者：130名）
12月	季刊誌「特別支援教育 No. 84 令和3年冬」
1月	公開研究協議会（参加者：50名）
2月	共に学び、生きる共生社会コンファレンス（参加者：30名）

4. 代表的な実践

オリジナルマップは、自分の「夢」や「願い」、「目標」を考えたりする時間軸的なつながりと、地域の学ぶ場を知ったりするという空間軸的なつながりを促すためのツールであり、それら二つの軸を大切にした実践が高等部と中学部での実践である。高等部1年生は、今年度取り組んだ産業現場等での実習の場所や内容、気付いたことをオリジナルマップに記入した。そこで、高等部1年生が自分たちの学びをこれから高等部に進学しようと考えている中学部3年生に紹介する実践を行った。自分たちの実習先について、必要な情報を写真や文字で整理して伝えた。発表する生徒たちは、発表するに当たり改めて自分の実習先の場所や内容を振り返り、端的にまとめることができた。聞き手となった中学部生徒も実習先の具体的なイメージを、話だけでなく、視覚的な情報で得ることができ、発表後には、自分たちで端末を操作して、改めて実習先の情報を確認していた。



写真5

また、高等部に入学した後どこで実習をしたいかなど考える機会となった（写真5）。

5. 研究の成果

本研究を通して、3つのつながりが構築された。

(1) 学年（学部）間のつながりとロールモデルの形成

代表的な実践にも記載したように、オリジナルマップを介して、学年や学部を超えて先輩が後輩に学びを伝えるという実践を通して、上級生は自分の学びを自覚したり、下級生は「夢」や「目標」を抱いたりすることにつながった。また、オリジナルマップの活用方法が学部においてステップアップすることで、学校としての学びの積み重ねにつながってきた。

(2) 自分の学びのつながり

単元終了後等の節目ごとに自分の学びを記録しておき、学年末の振り返りでは、教師との対話を通して、自分の学びや自分の好きな地域資源を見付けていくことにつながった。夏のセミナーで実体験と抽象概念をつなげていく上で ICT が効果的であるとあったように、児童生徒が年間の学びを具体的に振り返ることができる学習活動に結び付いた。

(3) 地域の学ぶ場とのつながり

オリジナルマップを活用した学習を進めていくことで学習意欲の高まりや地域への興味の広がりについて、生徒に変容が見られた。オリジナルマップを作成し、地域の施設や場所の登録の仕方を覚えると、地域と関わる学習を行った後には、自ら地点登録を行おうとする生徒が見られた。また、地点を登録するとうれしそうに友達や教師に紹介する様子が見られた。オリジナルマップを用いての学習紹介をした後には、生徒から「マップや写真にまとめたことで説明しやすかった」「分かりやすかった」「またやってみたい」などの感想や意見が出た。生徒自身がマップを活用して学びを共有することで自身の学びの広がりや深まりを実感し、学習に対する意欲や地域の学ぶ場への意識が高まっている様子が見られた。

6. 今後の課題・展望

オリジナルマップの活用を継続的に実践していくことで、次の点について効果が期待される。1点目は学びを蓄積するポートフォリオとしての機能である。学習の記録や活動の写真を蓄積していくことで、個人の学びの深まりや広がりが見えるポートフォリオとなることが期待される。また、教師間で活用することで、学習の履歴を共有する引き継ぎ資料としての役割を果たすとも考える。2点目は児童生徒の ICT 活用能力の向上である。オリジナルマップの活用を通して、機器を操作する力や必要な情報を取捨選択する力といった ICT 活用能力が育まれていくと考える。

7. おわりに

オリジナルマップは、卒業後も使えるツールを目指している。学校全体を通して、段階的にオリジナルマップを活用し、自分の学びを自覚したり、地域で学ぶ場を知ったりしていくことで、学校卒業後も生涯にわたって学び続けることができるツールになると考える。今後実践を振り返り、改善しながら、よりよい活用の仕方を模索していきたい。

8. 参考文献

- ・株式会社ストリートスマート&できるシリーズ編集部 (2020) 「できる Google for Education コンプリートガイド導入・運用・実践編」インプレス
- ・文部科学省 (2019) 「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―」